

「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」による派遣研究者報告書

(当経費の支援を受けての出張後、必ずご提出ください)

平成 30 年 9 月 2 日	
所属部局・職	霊長類研究所・博士課程学生
氏名	武 真祈子

1. 派遣国・場所 (〇〇国、〇〇地域)
ブラジル、アマゾナス州、マナウス市
2. 研究課題名 (〇〇の調査、および〇〇での実験)
種子食者キングオサキの採食行動の発達
3. 派遣期間 (本邦出発から帰国まで)
平成 30 年 5 月 23 日 ~ 平成 30 年 8 月 22 日 (89 日間)
4. 主な受入機関及び受入研究者 (〇〇大学〇〇研究所、〇〇博士/〇〇動物園、キュレーター、〇〇氏)
国立アマゾン研究所 (INPA)、Wilson Spironello 博士
5. 所期の目的の遂行状況及び成果 (研究内容、調査等実施の状況とその成果：長さ自由)
写真 (必ず 1 枚以上挿入すること。広報資料のため公開可のもの) の説明は、個々の写真の直下に入れること。別途、英語の報告書を作成すること。これは簡約版で短くてけっこうです。
<p>【研究の概要】</p> <p>ほとんどの霊長類が果実(とくに熟れた果肉)や葉を主要な食物としているなか、アマゾンの熱帯雨林に生息するサキ科のサルはユニークな食性を持ち、熟れた果肉ではなく、未熟な果実の種子を主要な食物としている。しかし種子は固い殻によって保護されていることが多く、簡単には利用できない。顎や採食技術が未発達な未成熟個体(コドモ)は何をどのように食べているのだろうか? サキのコドモにとっては、やわらかい「離乳食」を自ら探すことや、成熟個体(オトナ)との関わりの中で採食技術を学ぶことが重要になると考えられる。本研究は、ブラジル・アマゾンに生息するキングオサキを対象とし、以下の2点を明らかにすることを目的としている。</p> <p>① コドモの成長に伴って食物選択がどう変化するか。</p> <p>② コドモの採食行動の発達にオトナはどうかかわっているのか。</p> <p>【今回の渡航目的】今回の渡航では、10月から予定している本調査に向けて、必要な準備を整えることを目的とした。具体的には以下の活動を行った。</p> <p>1) 果実の利用可能性を調べるためのトランセクト設置・植生調査</p> <p>2) 予定している調査方法の試運転</p> <p>3) 各種ミーティング</p> <p>【目的の達成状況】</p> <p>1) トランセクトの設置と植生調査</p> <p>SATREPS 研究員の鬼澤康太氏のサポートを受け、無事すべての行程を終えることができた。最終的に幅 5m のトランセクトを合計 2803 m 作り、その中にある胸高直径 5cm 以上の樹木とつる、合わせて 1809 本をマーク、樹種を同定した。62 科 158 属 223 種を記録した。</p>

当サイトは建物や舗装道路が多い北側と、植物園のような形で二次林が保存されている南側とで植生構造が違ふことを予想していた。植生調査の結果、木の密度は北側の方が高い(細い木が多くある)一方で、樹種の多様度は南側の方が高いということがわかった。二群いるサキのうちグループAは北側に生息しており、グループBは南側に生息している。一つの孤立林内での生息環境の微妙な違いが、サキの食物選択にどのような影響を与えるかという点にも今後注目していきたいと思った。

10月からの本調査では、今回記録したすべての木を毎月チェックして、果実の有無を記録していくことになる。今回、かなりの労力をかけてセットアップを行ったので、よいデータの蓄積ができるように頑張りたい。

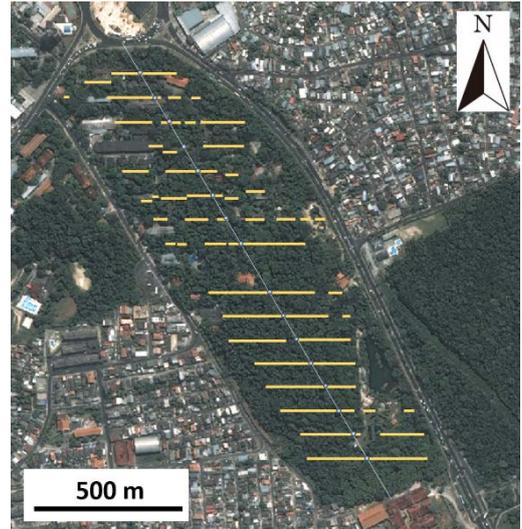


図1. トランセクトの地図

黄色いラインがトランセクトを示す。
ところどころ途切れているのは、建物や道路を避けたため。

2) 調査方法の確認

・行動観察

6月中旬～7月中旬の一か月の間に23日間合計159時間の群れ追跡を行い、調査方法の確認を行った。当初は個体追跡によってデータを取ることを予定していたが、実際やってみると視界が悪く、信頼できるデータが取れないことがわかったため、スキャンサンプリングで観察可能な全ての個体の行動を記録する方法に切り替えることとした。その他、採食行動のビデオ撮影、食物分配行動の記録、最近接個体の記録、糞尿DNAサンプルの採取など、報告者にとって初めての調査手法をいろいろ試し、データの集計や解析までの一連の流れを予習するための良い機会になった。

・サルの体重測定

給餌台と自動撮影カメラを利用して、サルの体重を非侵襲的に、かつ無人で計測する方法を模索した。図3のように、体重計の上に置いた箱の中に給餌のエサを入れることで、サキがその上に乗る、というところまでは成功した。しかし、カメラトラップにうまく目盛りの数値が映っていなかったり、箱が不安定で落ちてしまったりと、問題点が多くあった。今後、体重計と箱を固定するために、強力な接着剤の使用などを検討したい。

3) 各種ミーティング

・分析を依頼するラボとの交渉

ブラジルはサンプルの持ち出しに厳しいため、日本にサンプルを持ち帰って自分で実験・分析をすることができない。今回の渡航の重要なミッションのひとつが、サキのDNA分析(血縁解析)、食物の栄養分析、食物中の二次代謝物質の分析を依頼するラボをそれぞれ探すことであった。

ブラジルで指導教員を引き受けてくださっているWilson博士とAdrian博士に紹介をしていただき、DNA解析のラボと二次代謝物質分析のラボを見つけることができた。これにより、研究結果がより厚みのあるものになることが期待される。栄養分析については、ラボを確定させることができなかったため、現在メールにて協議中である。本調査が始まる前に確定させたい。

・サルへの給餌の仕方の相談

INPAでは毎日サルに給餌が行われているが、その時刻や量が日によってバラバラだったため、報告者の研究に影響がでることが懸念されていた。そのため、給餌の責任者であるAnselmo氏と、Wilson博士を交えて協議を行ない、10月からは報告者自身が早朝に給餌を行うことを認めていただいた。

「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」による派遣研究者報告書

(当経費の支援を受けての出張後、必ずご提出ください)

以上のように、非常に実り多く、次の渡航につながる良い出張となった。



図 2. トランセクト作りをサポートしてくださった鬼澤氏(右)と、植物の分類をしてくださった Jese Ramos 氏 (中央)



図 3. 体重測定の様子

6. その他 (特記事項など)

今回の渡航をサポートしてくださった松沢哲郎先生をはじめとする PWS リーディングプログラムの皆様、PWS 支援室の皆様にご感謝いたします。ありがとうございました。